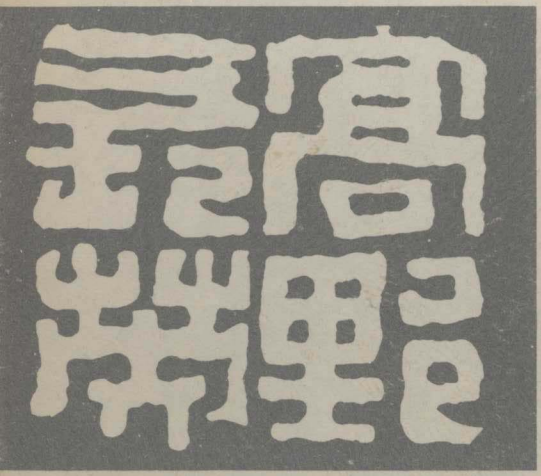

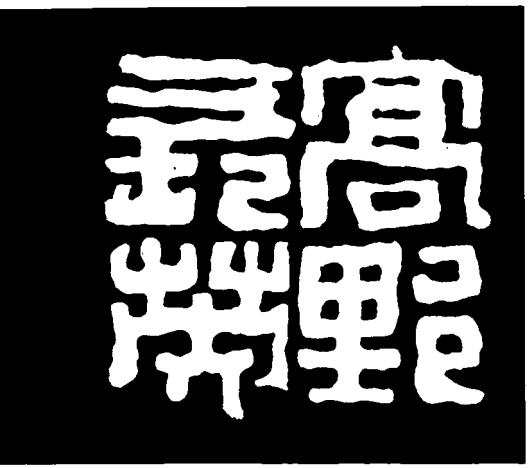

高野長英(下)

西口克己

高野長英（下）●西口克己

昭和四十七年十一月一日　発行
定価　六八〇円

著者　西口克己
発行者　藤山真人
発行所　株式会社　東邦出版社
東京都千代田区神田神保町二〜二八
電話　東京（二六一）五七二五〜七
振替　東京　八五二七五
印刷・日大印刷　製本・美成社

目次

Ⅴ 江戸 下獄の巻……309
Ⅵ 江戸 破牢の巻……409
Ⅶ 諸国 潜行の巻……507
Ⅷ 江戸 遺恨の巻……613
あとがき……640

V　江戸　下獄の巻

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

1

一夜、北町奉行所の詰小屋に留められた長英は、その翌日、なんの吟味もないまま腰縄を打たれて、小伝馬町の本牢へ送られた。

本牢では鍵役という役人が、奉行所の入牢証文を受け取ると、長英の姓名、年齢、住所などを確認し、牢内での諸規則を申し聞かせた後、百姓牢へ曳いて行った。東西の大牢とちがって、百姓牢と名づけられた新牢は、数年前まで初犯者のみを入れていたが、いまではその差異もなくなって、大牢とほとんど変りのない、やや狭い牢獄である。華山が士分として、侍牢——いわゆる揚屋入りを命じられたのにくらべて、長英は身分の低い町人や百姓なみの扱いである。江戸指折りの名医も蘭学者としての名声も、何の役にも立たなかった。罪人の世界でさえ、冷酷な身分制という鉄壁が設けられていたのである。

頑丈で陰惨な格子がずらりと並んだ牢獄の外鞘という廊下へ連行されたとき、鍵役は待ち受けていた張番に長英の腰縄を解かせた。

「さあ、衣類を脱げ。なにをぐずぐずしておる。ほほう、きさま町人のくせに贅沢なものを着ているな」

張番の役人は、鋭い眼つきで長英をにらみつけながら命じた。ここで金銀、刃物、火道具などの禁制品を所持しているか否かを調べるのだ。無言で長英は帯を解き、友信侯の奥方から贈られた羽二重の袷を脱いだ。

「襦袢も脱げ、下帯も、だ。裸になれ！」張番が叱咤した。

薄暗い牢格子の隙間から何名かの囚人たちが垢じみた髭だらけの顔を突き出すようにして、こちらを覗いている。その格子をつかんだ青黒い手指は、どれもみな不潔な爪をのばしていた。

「規則とあればやむをえん。しかし、わしはまだ罪人と決まったわけではないぞ」長英は吐きだすように呟いた。

「ふん、ここまで来て、まだ世迷い言をぬかすか！」

びしっ——いきなり張番は長英の片頬に火の出るような平手打ちをくらわせた。

長英は、ぐっと歯をくいしばった。激しい屈辱感がむら

むらと胸の底からこみあげてきた。この張番一人だけなら、とっさに殴り倒すのだが——待て、待て、むだなことだ。ここで暴れても、寄ってたかって問答無用で半殺しにされるのがおちだ。張番の獣じみた眼をじっと見返していた長英は、やがてふっと瞼を閉じた。にらみあいそのものが相手の憎悪をかき立てる、と気づいたのだ。瞼を閉じたまま、肌につけている最後のもの——下帯を解くと、ばさりと床の上に落とした。

「ふっふっふっ、観念しやがったか」

嘲りながら中腰になった張番は、板床の上に脱ぎ捨てられた長英の衣類や帯をゆっくりと調べはじめた。むろん刃物や火道具などはあるわけがない。だが張番は、ちょうど盲人が手探りするように指先を器用にうごかして、衣類のあちこちを押さえたり、つまんだりした。まっ裸で突っ立ったまま、瞼をなかばひらいて、その仕ぐさを見ていた長英は、しまった、と唇をかんだ。張番が羽二重の襟元を押さえながら、にたり、と薄笑いを浮かべたのだ。そこには真綿でくるんだ小粒銀が、かなり縫い込んである——春山はそう教えてくれた。これは只ごとではすむまい。一言不平をいっただけで、あの平手打ちだ。残忍なやりくちからみて、禁制を犯したとなると、何をされるかわかったものではない。長英は覚悟を決めて、ふたたび瞼を閉じた。

「おい、新入り……」

やがて、張番が奇妙な猫撫で声で呼びかけた。

「……」

無言で、長英はかっと眼をひらいた。いよいよ来たな。だが、意外にも相手は片膝の上に羽二重の袷を重ねたまま、あいかわらず薄笑いを浮かべている。それだけではない。いつのまに、どうして裂いたのか、襟の部分を切りひらいて取り出した幾片かの小粒銀を、片手の掌にのせて、かるく弄んでいた。

「おまえ、初犯のくせに、味な真似をするじゃねえか。娑婆で誰が教えたか知らぬが、地獄の一丁目の作法を心得ているとは、ふっふっふっ、まんざらの唐変木でもなさそうだ」

怒っている顔ではない。張番は、のっそり立ち上がると、羽二重の袷を長英の足もとへ投げ捨てた。同時に、猫撫で声を一変して、荒あらしい口調で命令した。

「よかろう、お調べはすんだ。さあ、履物を衣類で包み、帯で括れ。早くしろ」

やむをえない。ぶざまな裸姿で、長英は命じられたとおり、自分の身につけていたものを掻き集めて、両手に抱え

た。張番が、牢格子の側に控えていた鍵役に合図をした。
「百姓牢！」鍵役が叫んだ。
「へえい……」薄暗い牢の中から、誰かが陰気な抑揚をつけて答えた。
「北町奉行所からの新入りだ。送り状を読み上げる。よく聞けよ」鍵役は、あらかじめ届けられていた簡単な送り状を読み上げた。
「おありがとうございます……」またもや牢内から不気味な節まわしをつけた答が聞こえた。
「新入り、さぁ、はいれ！」
鍵番が戸前口の錠をはずして、ぎいと開いた。この牢の戸前口は、囚人一人々々が、前屈みに這うような姿勢で出入りせねばならぬほど低くて狭い。長英が、頭を低くして、苦がい唾をのみこんだとき、その後腰を役人がどん、と蹴った。
「な、なにをする！」
叫ぶひまもなく、長英は、異様な臭気の立ちこめた牢内の板床へ、衣類を抱えたまま、俯伏せにつんのめった。待ちかまえていた二名の囚人がぱっと跳びかかって、その両腕を左右から捩じあげると、奇妙な節まわしで、べらべらと喋り始めた。
「婆婆からうしやがった大まごつきめ、はっつけめ、素っ首を下げやがれ、御牢内は御頭、御角役様だぞ、ええ、……大坊主野郎め、汝がような大まごつきは……直な杉の木、曲った松の木、いやな風にもなびかせんと、お役所で申すとおり、有体に申し上げろ」
かっと頭に血がのぼって、何のことだか判らないが、どうやら自分の犯した罪科を白状しろということらしい。ふと気がつくと、もう一名の囚人が長英の衣類を奪い取って、何枚も畳を重ねた上に大あぐらで坐っている男の前へ差出している。
「やい、新入り、牢名主さまに、とっとと、シャクらねえか！」囚人の一人が、どなった。
長英は、ようやく放された両腕をさすりながら、無言で床の上に坐ると、牢名主と呼ばれた男を、じろりとにらみつけた。顔面一杯に黒い無精髭をはやした熊のような男である。細かい人相は、薄暗がりに眼が慣れぬせいか、よく見とれない。
「野郎、頭が高えぞ！」牢名主は、歯をむきだして、うなった。
「へえい……」控えていた囚人が答えた。「合点承知、首の骨をへし折っても、しっかり低めてみせまする」

たちまち長英は後頭部を鷲づかみにされ、ぐい、ぐい、と首を前へ押し曲げられた。いやもおうもない。鼻が汚れた床に触れそうになるほど、頭をさげさせられたまま、かなりの時が経った。

「ようし、頭をあげろ。新入り、てめえ娑婆で何を仕出来した。いまのはシャクリといって、入牢者が罪科を述べ、長い牢暮しの挨拶代りにする仕来りだ。白状しろ」牢名主が、にやりと笑って命じた。

「わしは、何もしておらぬ。役人が、勝手に牢入りを命じた」

「なんだと！ ……」

「無実だ。しいていえば、幕府の気に入らぬ書物を書いた。お上を恐れぬ不届者ということらしいな」と長英は、うそぶいた。

「ふうん、妙な野郎だ。役人の悪口を書いたのか」

「まあ、そうだ。説明すれば長くなるが、そんなことは面倒臭いだろう。説明しろというなら、してもよい」

「うるせえ！」牢名主が一喝した。「そんな浮世ばなれしたお咎めで地獄へ来るとは、てめえ、ほんものの大まごつき野郎だ。ところで、やい、新入り、てめえ、地獄のツルを持ってきたか」

「うむ、ツルか。おまえが奪り上げた羽二重袷の襟に縫い込んでおいた。それを張番めが探りだして猫ババしおったわ。おまえらよりは、役人のほうがよっぽど悪人だぞ」

自棄くそであった。どうでもしろ、といわんばかりに長英は牢名主をにらみながら答えた。

「こ、この間抜けめ、せっかくのツルを――」と傍に控えていた囚人が長英の肩を蹴とばした。「襟に縫いこむ手は古いやい、なぜ尻の穴に挟んで届けなかったんでえ」

「そんな不潔で危険な真似は出来ぬ。わしは、医者だからな」のけぞりながらも長英は不敵に言い放った。

「なんだとぉ！」

「わっはっはっ、まぁ待て」牢名主が片手で制した。「なるほど、さっきの送り状でも、医者だとぬかしていたが、それにしてはいい度胸だ。ふうむ、この羽二重の襟か……」

牢名主は、なんと思ったのか、太い眉をしかめながら、自分の前に置かれた長英の持物から羽二重の袷をぐいと引き抜くと、その襟のあたりを指で無雑作にしごいた。どうにか暗さに慣れた長英の眼にも、その片襟の裂けているのが見えたが、残りの片襟は裂かれていない。はてな、と考えるひまもなく、牢名主はその裂けていない部分を撫でな

がら、にたりと笑った。
「あの張番め、遠慮しやがった。ふっふっふっ、ツルは山分けだとよ。片襟だけでも近ごろ珍しく、ずっしりしてやがるぜ。おい、三番役――この医者坊主を客分扱いにしてやれ」
「へえ、わかりやした」長英の肩を蹴った三番役と呼ばれた囚人が、ぺこりと頭を下げた。「やい、新入り、お礼を申しあげろ。牢名主さまのお情けで客座をもらえるんだぞ。これあ格別のことだ」
こうして長英は、入牢までの持物はみんな奪り上げられたが、古い垢じみた単衣物一枚と三尺帯を一本あたえられた。獄衣である。それからなお、わけのわからない言いまわしで、こまごました牢内の仕来りを聞かされたあと、キメ板で尻を二つ三つ叩かれてようやく坐る場所を教えられたのであった。
客分というのは、畳一枚の上に二人で坐るのである。新入りにしては破格の待遇であった。百姓牢は三間に五間の広さで、牢名主や役付囚人は畳の上にゆっくりと坐っているが、残りの平囚たちは、一畳に何名も肩をくっつけあいながら窮屈そうに坐っている。ははあ、ツルの効き目か、それにしても噂に聞いていたが、ひどいところだな、と長英は、いまさらのように憮然として周囲を見まわした。牢内が薄暗いのは、明り採りの窓が小さくて高いせいである。背丈ほどもある羽目板の上に太い格子がはめこまれ、格子の隙間は、わずかに三寸ほどしかない。その外側にも、外鞘と呼ばれる板廊下の向うに同じような太格子がある。これでは牢内に陽の射しこむわけがなかった。そしてこの二重に外界から遮断された陰湿な一画に、何日間も入浴していない不潔で垢じみた囚人たちが、ぎっしりと詰めこまれて、饐えるような異臭を漂よわせていた。こんな生きざまが長びけば、拷問で痛めつけられた者や、身体の虚弱な者や、持病のある者は、正式に処刑されるまでに、くたばってしまうだろう。死ねば白州の手間が省ける。犬か猫の死骸を片づけるように無雑作に莚に包んで、どこかへ運び出されてしまう。牢死――かつて長英は医者として、この二字のなかにさまざまな病名や死因を想像していた。だが牢内に放り込まれて半刻と経たぬうちに、はっきりと悟った。牢死とは、まさしく牢獄そのものが一寸刻みにじわじわと人を殺すのだ。その一つ一つの病名などは、詮議するだけ野暮かもしれぬ。
いつのまにか長英は、寝不足と疲労のために、坐ったまま、うとうとしていたが、囚人たちのざわめきで、はっと

瞼をひらいた。薄暗い牢内の天井のあたりが妙に仄明るくなっている。外界の夕焼けのせいらしかった。

「七つ刻ぃ――五番役、ありがたく夕飯を頂戴せい……」

外鞘の廊下を何名かの雑役が往来して、叫んでいた。囚人たちの食事は朝の五つ（八時）と夕方の七つ（四時）の二度きりであった。

「へえ、おありがとうごぜえます……」

牢内の戸前口に控えていた五番役と呼ばれる囚人が唄うような節まわしで答えた。狭い戸前口が半ばひらかれ、次から次へと夕飯が手渡された。順送りに大勢の囚人たちが中腰のまま仲間に配ってゆくのだが、のろのろした動作にもかかわらず、一種のざわめきをともなった慣れきったやりくちであった。

「おい、新入り、ぼんやりしてねえで、さっさと頂戴しねえかよ」

長英は、一枚の畳を半分ずつ分けあった隣の客分の囚人に肱で突つかれて、あわてて自分の食器を受け取った。盛り切りにした雑穀まじりの盛相飯と一切れの古沢庵、それに冷えた淡い汁が一椀きりである。牢内洩れなく配られたのを見届けた五番役が合図をしたかとおもうと、囚人たちは背中をまるめながら、いっせいにがつがつと食べはじめた。ゆっくり箸をうごかしている者は一人もいない。かすかにふるえる片手でしっかりと盛相飯を抱えこみ、異様な眼つきで見つめながら、歯ぐきをむきだし、唇をゆがめて、がつがつと食べている。冷えた汁の一滴をも、こぼしてなるものかと、両手で拝むように剥げた椀をささえて啜っている者もいる。みんな、おそろしく餓えているのだ。

「新入り、はやく平らげねえと時刻を区切って奪り上げられちまうぞ」隣の男が、じろりと横目で長英をにらんだ。

「うむ……」

うなずいた長英は、しぶしぶ箸を手にした。今朝、奉行所で梅干入りの握り飯を一つ頬張ったきりで、空腹のはずなのだが、どうにも食欲がない。

「おかしな野郎だな、てめえは――だけど、むりもねえや。初めて牢入りしたやつは大抵この盛相飯が咽喉を通らねえで、へこたれるもんさ。けどよ、そこが勝負だ。この飯を食い慣れねえことには牢内で体力がつづかねえ。白州で裁きがつくまでに、くたばっちまうのがおちだぜ」

「なるほど、そうかもしれぬ。飯とおもわずに薬とおもって呑みこむか……」

つぶやいた長英は、むりやりに盛相飯を二口、三口咽喉の奥へねじこむようにして食べ始めた。たぶん稗か粟がご

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

っそり混ぜてあるのだろう、その飯は舌の上で砂粒のようにざらつき、おまけに発酵したような黴くさい匂いが鼻を突く。早くも隣の男は、その盛相飯をさもうまそうに、ほとんど平らげてしまっていた。

「おい、新入り、どうにも食いきれねえのなら、残りはおれが食ってやるぜ」

「いや、その分だけ体力が弱るといかん。わしは食べるぞ」

断わった長英は、ゆっくりと椀汁を啜った。野菜汁だとおもったら、そうではなくて得体のしれぬ魚油をうすめたような、生臭い汁であった。うっ、と眉をしかめた長英は、おもわず吐気をもよおした。吐いてはいかん、吐くな！必死に歯をくいしばったとき、不意に一つの光景、というよりは、一幅の画像が記憶の底であざやかに浮かび上がった。いつか見た華山の写生帖である。あの大饑饉の最中、施し小屋の前に椀を抱えて列をつくっている餓民の姿だ。半裸体の餓民たちは、骨と皮ばかりに痩せていたが腹部だけが蛙のようにふくれあがっている……そうだ、わしはあのとき〈救荒二物考〉を著わして得意になっていた。馬鈴薯を食え、早蕎麦を食え……だが、それは手遅れだった。すくなくとも、あの餓死寸前の人びとにとっては、もう間に合わない学者の寝言だったかもしれぬ。ちょうど、わしがこの牢内で馬鈴薯を求めても得られぬのと、おなじことだ。そうだ、確かにそうだった。わしは、この臭い盛相飯を薬のつもりで食うとつぶやいた。これは、まちがっている。

「やい、新入り、面をあげい！」

いつのまにかすぐ前に、五番役が立っていた。頬骨のとがった眼つきの鋭い男だ。無言で見上げた長英の鼻さきへ、にゅっと片手の掌を突きつけた。その垢じみた不潔な掌の上に黄色い卵巻が一個、ころりとのっている。

「てめえ、新入り早々、仕合せな野郎よ。これは牢名主さまからの下され物だ。お礼を申しあげて、ありがたく頂戴しやがれ」

見ると、牢名主は一段高い畳の上にあぐらをかいて、ほかの囚人たちの盛相飯とは違った重箱の肴を悠々と箸で突っついている。それどころか、ぼろ布で包んで外形をごまかした大きな酒徳利さえ傍に置いている。ほう、と長英はあきれた。頑丈な格子で世間から完全に遮断されているはずの、この地獄にも奇妙な抜け穴があるらしい。この抜け穴をつないでいるのは、ほかならぬツル——気の利いた囚人が内密で持ち込んでくる幾ばくかの金銭にちがいない。役

付の囚人は、この奪りあげたツルで牢番を買収し、なにかと便宜を計ってもらっているのだろう。すばやく、これだけのことを悟った長英は、無言のまま、卵巻を箸でつまみ取ろうとした。掌にじかにのせた不潔なものだが、隣の男にでもくれてやろう——が、五番役は、ひょいと掌をひっこめて、どなりつけた。

「バ、バカ野郎、頂戴する前に、名主さまにお礼をいわぬか！」

なんという屈辱！ ……だがその瞬間、長英は自分でもわからぬ妙な心境を味わった。こくん、と頭を下げたもう一人の長英が出現したのだ。

「いやはや、ありがたいことだ。牢名主どの、この卵巻は色合いといい、形といい、本物の小判切餅にもまさる牢内のご馳走だ。小判は嚙めぬが、卵は滋養満点——長英、うれしく頂戴仕る」

そういった長英は、にこりともせず、ゆっくりとその卵巻を箸でつまむと、つい一瞬前には隣の男にやろうとしたことも忘れて、ぱくりと自分の口中へ放りこんだのであった。……

やがて、囚人たちの夕飯がおわり、雑役が戸前口から食器類を運び去ったあと、牢内にはようやく黄昏の色が濃くなってきた。

「やいやい、やい……」と詰番の囚人がどなった。「てめえら、詰めの神さまのお世話になりたけりゃ、暗くならねえうちに用をたしておけよ。夜中の手探りで神さまを汚がしやがると、ただではすまされねえ。罰あたりのお仕置を覚悟しやがれ」

なるほど、牢内の火気厳禁は聞いていたが、灯も許されないのだな、と長英は知った。ひととき、宵やみのなかで獄衣の囚人たちが次つぎと灰色の影絵のようにうごめきながら、詰めの神——便所へ通じる牢隅の落間へ姿を消しては、現われた。落間の傍に控えている詰番が、一人々々の囚人が順番に詰め専用の草履をはいて出入りするのを見張っているらしく、その列は、のろのろとつづいている。かすかな悪臭がただよってきて、長英はおもわず顔をそむけた。

「おい新入り、そいつはいけねえ」隣の男が肱で突ついた。「詰めの匂いは、みんなのものだ。それをいやがる素ぶりは、まだ婆婆っ気のぬけねえ証拠——見つかると、ひっぱたかれるぞ。顔をそむけるかわりに、口で呼吸をしろ」

「ああ、そうか……」

うなずいた長英は、両手を膝に置くと、唇を半ばひらい

た。男のいうとおりなのだ。自由を奪われた囚人が生きのびてゆくためには、食べて、排泄しなければならぬ。排泄に悪臭はつきもの——こんなことは医学のイロハではないか。そういうわし自身、やはりおなじ所作をして、悪臭を放つことになるのだ。隣の男が、またいった。

「新入り、おまえも詰めへ行ってこい。やせ我慢をしていると、ひどい目にあうぜ」

「そうだな、行ってこよう」長英は苦笑しながら、のっそりと立ち上がった。

やがて夜——牢内は、深い暗闇に包まれてしまった。高い格子の隙間から星明りのような仄かな微光が洩れているが、むろん囚人たちが眠っている板床までは届かない。眠るといっても、畳半分をもらった長英たちは、どうにか身体を横たえることが出来たが、多くの平囚人は、畳の上へ両側から交互に頭と肩をのせ、腰から下は堅い板床へ投げ出して眠るのだ。大きな目刺の乾物を並べたような無残なありさまである。ひどく蒸し暑い。まるきり風通しのない牢内には、垢だらけの人間の肌からにじみでる饐えた汗の匂いと、便所から洩れる悪臭とが、どんよりと澱んでいて、なにか腐敗した沼の底へむりやりに沈められたような息苦しさであった。だが、ここは死に絶えた沼の底ではない。逆に、このねっとりした生温かい暗闇こそは、あらゆる夜行性の虫類が囚人たちの生血をむさぼり吸おうとしておそいかかってくる何刻かでもあったのだ。

不規則な鼾や歯ぎしりにまじって、かすかに蚊の羽音が聞こえてくる。昼間、薄暗い天井や板壁の隙にひそんでいたのであろう。あるいは牢格子をくぐって翔んでくる蚊もいるらしい。低く、にぶく、うなるような羽音が入りみだれて、ひとときもやまないのだ。たまりかねた長英は自分の肌を刺す蚊を殺すために何度も掌であちこちを叩きつづけた。だが、ふと気づくと、ほかの囚人たちは、まるで蚊に螫されることがないかのように、誰ひとり掌の音をたてていなかった。慣れてしまっているのだ。牢内での疲労と無気力とが、泥のような眠りに囚人たちを引きこんでいるらしい。ふうむ、と長英は唇をかみしめた。こんな地獄へ投げこまれたからには、わしも連中とおなじように神経をしびれさせないと身体がもたぬぞ。

だが、羽音をたてる蚊の群れはまだしもであった。まもなく長英は背中から股にかけて、点々と小さな針で突かれるような痛痒さを感じて、おもわず半身を起こした。音もなく、板床の隙間や古畳の縫目から、ぞくぞくと蚤や虱が這いだして、おそいかかってきたのだ。

昼間でさえ見わけにくい微小な害虫を、暗闇のなかでひねりつぶせるわけがなかった。それも一匹や二匹ならまだしも、おそらく長英の身体のまわりだけでも、何匹も何十匹もむらがっているにちがいない。くそっ、くそっ……長英は、耐えきれぬ痒みに転々と身体をよじりながら、刺された痕を手さぐりの爪先でぽりぽりと掻くほかはなかった。明るみでみれば、きっと血のにじんだ淡赤いすじが浮いているであろうほど、あちこちを強く掻きつづけているうちに、肌全体がかっかっと熱をおびたように火照ってきた。これはいかん、と長英は気づいた。こんな不潔な場処で肌を傷つければ、おそらく化膿するか、それとも始末のわるい皮膚病に犯されるだろう。掻いてはいかん、がまんしろ、がまんしろ、と医者らしく歯をくいしばるのだが、やはり辛抱しきれずに手のほうが半ば無意識にうごくのであった。

一刻、二刻――そんな所作をくりかえしながらも、長英はときおり、ふっと吸いこまれるような眠気をおぼえはじめた。数日来の緊張と、自首して入牢した今日一日の異常な経験とが積りつもった疲労となって、頭の芯が綿のようにしびれてくる。その、もうろうとした夢うつつのなかで、長英は細い一本の糸にも似た考えを、途ぎれとぎれにたぐっていた。わしは、なぜ、あの牢名主がくれた卵巻を、恥知らずにも食ったのだろう……あれは不潔だ……乞食のような垢だらけの掌にのせた黄色いかたまり……ふうむ、数年前の饑饉で無数の餓民が死んだ……それにくらべれば……あの卵巻をくわぬとすれば……ぜいたくか……いや、しかし、牢内の仕来りに慣れるのは……いまの幕府のやりかたに降参する卑怯なことではないか……ちがうな……ちがうぞ……白州で黒白を決するまでは、死んではならん……自首したのは、まちがいかな……母上や、遊幾は、いまごろ、どうしているかな……だが、もう手おくれだ……一旦、沈んだ石は……水が涸れるまで……石になっているほかはあるまい……ああ、眠いな……眠い……忘れてしまうか。

小関三英は、自宅の奥座敷の床柱を背にして端座したまま、かるく瞼を閉じていた。

この座敷は、かれの書斎でもあったが、一閑張の机が寂しく置かれているだけで、つい四、五日前まで壁ぎわの大棚にぎっしり積み上げてあった書物類は、蘭書はむろん、和漢の書物さえ一冊も残っていない。荒あらしく土足で踏みこんできた奉行所の役人が十把ひとからげに大八車に積んで押収して行ったのだ。

古びて色あせた紋服に皺だらけの仙台平の袴――それは清貧に甘んじていた三英の精一杯の正装であった。去年の暮、長英の結婚式に祝客の一人として赴いたときには、このうえに羽織を着用していたが、そのおなじ紋服、つまり季節向きの単衣ではなく袷である。そのせいもあるが、障子をぴたりと閉め切った部屋のなかは、ひどく暑かった。家には、三英のほか誰もいない。長英に遊幾を紹介した経緯からいっても、本来仲人役であるべき三英が、その役を華山夫妻に頼んで、みずから辞退したのは、数年前に妻を亡くして、もっぱら学問三昧の孤独な暮しを続けていたからである。

あの縁むすびは、長英の母に頼まれたとはいえ、わしとしては一生一度のお節介であったな、と三英は、通いの下婢を帰し、玄関の戸締りをすませてから、おもむろにこの紋服の袖を通したとき、ふと苦笑した。わし自身が正式な仲人の資格のない男やもめのくせに、あんな出すぎた真似をしてしまった。いまとなっては、牢内の長英をかえって苦しめているにちがいない。しかし、半年前に誰が今日の出来事を予測できたろう。長英だけではなく、田原藩家老の華山までが、いとも無雑作に投獄されてしまった。そして、おそらくこのわし自身も、二人の取調べが進むにつれて、到底、無事にはすむまい。

三英は、自分が生まれつき虚弱なこと、日頃から病気がちなことを、いまほど残念に思ったことはなかった。もし華山や長英につづいて投獄されるようなことになれば、この肉体的な弱さがどれほどの負担になるか――おそらく苛酷な条件の下では三日と保たないことを、かれ自身、冷静に計算していた。この計算は、万一の場合の拷問に耐えきれぬ意志の弱さとは無関係である。たとえ失神しても、そうした責苦で口を割ったり、同志を売るようなことは絶対にあるまい。むしろそんなときには、自分自身が苦痛のため失神してゆく状態を、もう一人別な三英となって冷やかに観察するくらいの闘方医魂をそなえているつもりであった。

だが、そういう意志の強さだけでは肉体の破滅を防ぎ切れるものでないことも、また事実である。医者として、三英は自分の健康状態を誰よりもよく知っていた。血圧が低いせいか、ときおり心臓の鼓動が異常に乱れて息苦しくなる。肺臓も労咳こそないが、ちょっとした気候の変化で風邪を引いて咳込みがちである。胃腸も弱い。おまけに生まれつきの跛足が近頃ではひどい神経痛におそわれている。それやこれやで尚歯会に加盟してはいるものの、ここ数年

来は岸和田藩の典医というのも名のみで、ほとんど藩の江戸上屋敷へ伺候することもなく、藩もそのことは暗黙のうちに許してくれていた。いわば三英の健康は、かれ自身の冷静な計算と処方箋によって、空中に張りわたした静かな学究生活という一本の糸の上で回転している独楽のようなものであった。この糸が断ち切られ、生活のリズムが激しく揺られるときには、まちがいなく死が待っているのだ——獄死。

それは、どう考えてみても避けられそうにもない切迫した情況であった。すくなくとも三英の記憶力と緻密な推理からすれば、数日中にも改めて捕吏が踏み込んでくることは必定であった。

あのことさえなければ……と三英は、ほろにがく想い出していた。かれの記憶のなかに鮮烈に灼きついている一冊の蘭書があった。黒い革表紙の書物で、かなり分厚い頁を重ねた天の部分が深紅に染めてある。そして表紙のまんなかあたりは、何かの印を消すために焦がしたものとみえ醜く剥がれていた。もう二年も前のことだが、巣鴨別邸で二人きりのとき、華山がその書物を三英に手渡しながら、さりげなくいったのだ。

「小関うじ、友信侯が長崎の通詞をつうじて秘かに入手された蘭書のなかに、こんな珍本が混じっていてな、わしは読めぬが、高野うじに蘭文の手ほどきを受けておられる侯が、この書物の扉文字を訳鍵で調べられたところ、どうやらこれは、あちらの経典らしいとのこと、ちがうかな」

「ほほう、ちょっと拝見……」

三英は、その書物をひらいてみて、愕然とした。疑いもなく、それは御禁制の切支丹の聖書であった。表紙の剥がして消した部分は、十字架の印にちがいあるまい。だが、たとえ信徒でなくても、この書物を隠し持っているだけで死罪をまぬがれぬというのに、いったい誰が何の目的で、ほかの蘭書類にまぎれこませたのか。おそらく長崎の通詞とやらも、故意に売りこんだのではなく、うっかりしていたとしか考えられない。

「渡辺うじ、これは……まちがいありません。こんなものを侯のお手許に留めておいては危険だ。内密に焼却なさったほうがいい」

三英の記憶のなかに、あの大塩平八郎が天満与力として、隠れ切支丹を拷問したときの、忌まいましい、血なまぐさい事件が、ありありとよみがえっていたのである。

「なるほど」と華山はおだやかに頷いた。「侯もおなじ意見であった。いや、そうしろということで、この書物をわ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook